

●現代日本のニュー&リニューアル

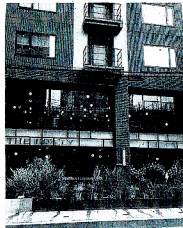


カルチャー

次回は10月18日に掲載します



六甲山サイレンスリゾートの中庭から臨む旧館



ザ・ライブリー 大阪本町のイントランス

(19年時点)のイタリアでは、それぞれの遺産の哲学を踏まえ、保護し

場風文化施設などが随時、ニューオープン予定だそう。

グローバル エージェンツ

20年3月21日、大規模リニューアルを経て新たな時を刻む「京都市京セラ美術館」がオープンする。オープニング関連の記者会見で、基本設計と館長を務める建築家、青木淳氏のコメントが印象に残った。「日本において昔の建物を残すことは意味があり、それらを再生させる試みはより重要になる」という内容だ。そこで近年、様々な分野で注目すべきキーワード「ニュー&リニューアル」に的を絞る。興味を抱いた2組のプロジエクトに焦点を当ててみたいと思う。

グローバルエージェンツは、映画館のあるソーシカルアパートメント、パブリックスペースが充実したライフスタイルホテルなど豊かな発想力を携え、近年成長を続けている。代表取締役を務める山崎剛氏が05年、大学在学中に設立。若き情熱あふれるスタッフが集結する文化創造企業だ。彼らがこれまで手掛けてきた9棟のホテルは、いずれもリニューアルによるものだったが、このほど開業した10棟目「ザ・ライブリー 大阪本町」は、初の新築かつ大阪デビューとなった。そこで、ニュー&リニューアルをテーマに、現地で山崎氏と対談の機会を得た。

六甲山サイレンス リゾート

国内外の人々に愛され、文化を育み、惜しまれつつも暮を閉じた1929年開業の旧六甲山ホテル。約2年の修復工事を終え、誕生から90周年目の今年、「六甲山サイレンスリゾート」として7月に開業した。静かに語りかける過去、そして未来に向けて進行中の壮大な夢に共感し、足を運ぶことが数回。幸いにもこのプロジェクトの設計とディレクションを手掛けるイタリヤのデザイナー・建築界の巨匠ミケレ・デル・ルッキ氏に話を聞くチャンスが訪れた。

そのエッセンスは「世界遺産登録教団別ランキング1位

イタリアの巨匠と日本の新鋭が挑む

スなど)の復活、また自然と共に存し、世帯を離れて今後「六甲の生き証人」としての役割を担っていきけるよう取り組んでいると語る。

ちなみに環境への配慮から館内外を含め、構造用の鉄筋以外は全て自然素材を使う。現在は旧館と「ザ・グリル」がリニューアルオープン。さらに「ザ・カフェテリア」や森の中を歩くようなイメージの円形ホテル「ザ・リング」、スパ、野外劇

間、DJブース併設の音楽へのこだわり、階段を活用したアクティブなフロア構成など。一方、後者は極細みのある中で、時空やゲストの多様性を心地よく交錯させ、創意工夫を凝らす醍醐味が格別だという。おそらくその象徴的存在は、小樽市の歴史の建築物を再生した「アンワインド ホテル&パティオ」と言えよう。「ライフスタイルジャーナリスト」宇佐美浩一